
水音ラルの超絶番外編

水音ラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水音ラルの超絶番外編

【Zコード】

Z2115Z

【作者名】

水音ラル

【あらすじ】

「仮面ライダー・ディージェント／破壊の代行者」の作者、水音ラルが送る非常にどうでもいいネタ話で構成された短編集！！

キャラクターは後書き仕様ですので、キャラ崩壊は当たり前！
ギャグ成分が欲しい方は、是非ご拝読ください！！

If stor も須藤兄妹が本当に兄妹だつたら~（前書き）

このお話は、サブタイトルの通りもし須藤歩が仮面ライダーではなく普通の大学生で、亜由美がその妹として一緒に暮らしていたらと言つ、私の妄想全開の番外編ですー。w。

なお、仮面ライダーの登場人物は出でますが、全員極々普通（？）の人達です。戦闘などは一切ありませんのでご了承をm（— —）m

それでは本編の事は頭からはずしてお楽しみください（・w・）

If story 須藤兄妹が本当に兄妹だつたら

私は、須藤亞由美は石ノ森町の高校に入つてからは、大学に通つ兄である須藤歩の暮らすマンションで一緒に暮らしている。

兄が大学に通う為の居住先を決める際、両親が近いうちに私も兄と同じ大学に通うのだからと言つて少し大きめの部屋を借りたのだ。それからかれこれ三年間、兄と一緒にいるのだが、今一つの問題にぶち当たつていた。

事の発端は私が兄に用があつて兄の部屋に訪れた事が原因だ。

「兄さん、入るよ」

軽くドアをノックして中へ入つたのだが、私は目の前に広がる光景を目に思わずこう呟いてしまつた。

「……何このカオス？」

もはや「ゴミ屋敷だつた。

兄の部屋にはしばらく入つた事がなかつたから彼のお部屋事情は知らなかつたのだが、いくらなんでもそれはそれは酷い有様だつた。

まず山のようく積まれた本で出来た塔が何本も建設されている。どうやら小説・マンガ・教材などで区分けされている様だが、今にも崩れそうだ。

次に床に散らばつたゴミ袋。

その半透明の袋から見えるのは菓子パンの包装紙の様で、それが部屋の隅っこに山を築いていたみたいだが、その中から崩れていくつ

かが部屋の中央に転がっている。

そして最後に、この部屋の奥に存在しているであろう「デスクチェア」に座っているこのカオスを生み出した存在が何かの本を熟読している。

「そつ…この人こそが私の兄…

「ん？ どうしたの畠由美」

須藤歩その人である。

少し長めの真ん中分けの黒髪に、それなりに端正な顔立ちなのだが、虚ろな目（私的には死んだ魚の目だと思つてゐる）のせいで少々残念な感じになつた隠れイケメンである。

「兄さん…どうやつたらこんな惨劇が起きるの？」
「惨劇？」

私は部屋を見渡しながら言つが、兄は何の事だかサッパリの様だ。私は深く溜め息を吐くと、キッと兄を睨みつけてズンズンと近づいて行つた…が…

「あ、もう少し慎重に歩かないと……」

「デザダザダザ…！」

「…、ヤアアアアア…？」

「やつなるよ」

本の塔が私に向かつて崩れて来たせいで完全に埋もれてしまった。言つのが遅い…！ そしてやつぱりテンションが低い…！

兄の口調は抑揚がなく、常に低いテンションで話すのだが本人曰く「これでも高い方」らしい。

現に兄の知り合いに今の兄の心境がどんな感じかと伺えば、十人中十人が「テンションが高い」と答えるだろう。私はゆっくりと本の中からドス黒いオーラを放ちながらゆっくりと立ち上がった。

「兄さん……」
「ん? 何?」

兄は私のオーラに一切気付いてる気配がない。それが余計に私の怒りに拍車を掛ける。

「どうあれ、」の部屋から出で

「え？ 何て？」

私は無理矢理兄を部屋から放り出し、部屋の片づけを始めた。

「で、何で私の家に来てんのよ？今の話と関係があるの？」
「お願い、察して加奈^{かな}…刑事の娘としての推理をここで働かせて…」

それから一週間後、現在、私は幼馴染の住んでいるマンションを訪ねていた。

彼女の部屋は実に女のナリシベ藤原加奈と言つ少女の印象にもピッタリだった。ウン、やつぱつゝ眞つ部屋が良によね。

「……軽く推理してみたけど、アンタが歩と暮らすのが嫌で、元家出して来たつてイメージしかわかないんだけど……」

「やう、それー！その通りー！…だつてあの後、丸半日かけて兄さんの部屋掃除したんだよー！？それなのに今日また兄さんの部屋を見てみたら先週と同じ光景が広がつてたんだよー！？私の労力を返してほしいー！」

「そりや一週間もすれば散らかるのは当然でしょ……しかも相手は男なのよ？掃除好きの男の人なんて翔しょうじゅーさんくらいのものよ？」「そりややうだけど…ー翔ーさんほどは行かなくてももうひょつと氣を配つてほしー…ー…」

翔ーちゃんと眞つのせーの町にある「レストラン・アギト」と眞つ変わつた名前の店で料理長をやつている青年の事だ。何でも兄の先輩に当たる人らしく、人付き合にがとても良い好青年だ。

まあ、時々寒いダジャレをかまして来るのだけは勘弁だけど……。

「で、本氣でーに泊まる気？..」

「イヒスー！」

「だが断る」

「ヒドイー！？」

それはあんまり過れるーもひょつと恼んでくれてもいいじゃんーー。

「だつて、どうせ『兄さんが心配だから帰る』とか言つてすぐに戻るんじゃないの？」

「そ、そんなことないもんーー。」

「どうだかね…歩が」の町に越して来た頃は授業中でもすつゝ心配してたじやん」

「うぐ……」

だつて、あの人ほつとくと何仕出かすか分かつたモンじやないよ…? 部屋の事もそうだし、変な友達多いし、ご飯なんて基本菓子パンとチャーハンなんだよ!? 不摂生にもほどがある!!

「だつたらこんな所で油売つてないで早く帰りなさい。今日帰つてるときに歩見掛けたんだけど、野上兄弟の末っ子に絡まれてたわよ?」

「ゲツ!?

「マズイッ! 末っ子つて一番危ない方じやん!…リュウ君何かに付き合つてたらボロ雑巾になるよ!?

あの子、元気なのは良いんだけど元気過ぎて周りに迷惑かけちゃうんだよねえ。しかもそれがウチの兄と一緒にいたとなると何が起きるか…連れ戻さないと!

「どこので見かけた!?

「商店街の方よ」

「分かつた! 行つて来る!…」

「逝つてらっしゃ〜い」

「字が違う!?

加奈の最後の言葉が気になるものの、私は急いで彼女の部屋を後にした。

商店街にやつて来たのは良いものの、JJJは何気に広い……さて、どこから探すか……

「ん？ お前は確か、須藤の妹の方か？」

「へ？ あ、天道さん」

落ち着き払つた声が私を呼んで来たのでそちらを振り向くと、そこには作務衣を着た一枚目顔の青年が立つていた。

彼の名は天道総司……兄の友人の一人だ。
文武両道、才色兼備で何をするにしても完璧超人って感じの人なんだけど、一つ問題が……

「え～と、天道さん……こ～ら辺で兄さんを見かけませんでしたか？」

「……おばあちゃんは言つていた」

ほら始まった……。

「人を頼る前に、まず自分を頼る事が大事だと……」
「つまり自分で探せつて事ですね？」

「この人、偶にこういつおばあちゃんの教えを言つて遠回しに答えて来るんだよね～。普通に知らないって言えればいいのに……。
後、右手で天を指差してるけど何か意味あるの？」

「フツ、そう言つ事だ。流石はアイツの妹だな……俺のおばあちゃんの教えをすぐ理解するとは……」

「あ～ハイハイ、それじゃあ探してきま～す

私はとりあえず適当に流して天道さんと別れた。

それにもしても、何で兄の知り合いには変人しかいないのだろうか…

…。

兄は一人でいる時は我が道を行くけど、誰かと居る時は振り回されっぱなしになるといつ習性があるから、まずは一緒にいると思われるリュウ君の考え方順じてゲームセンターにやって来た。ほら、最近の子つてよくこいつ言う所で遊ぶからや。

「う～ん…一通り見たけど、そつにないなあ～」

『はいなあああああ…』

『うおおおおお…』

ん？何だか向こうの方で盛り上がってるみたい。何があるのかとそちらを見るとそこは人だかりで溢れていて、その中央にいる人に注目している様だ。

確かにそこに設置されてたゲーム機はダンスゲームだつたはずだ。気になつて來たので、ちょっと覗いてみよ。

「ああ～ダメや！あんのクソガキのハイスコアを追い越せへん…！」

そう頭を抱えながら喚いてたのはパンクな格好をした青年だつた。しかも、この人も兄の友人の一人だ……。今日は一体何なのだろうか……厄日？ 厄日なの……？ 帰らないとか言つたバツなの？

「お、嬢ちゃんやないか！ おひさ～」

「章治さん……美玖さんほつといて大丈夫なの？」

青年……章治さんはこちらに気付き軽く挨拶をしてきた。この人つて確かにスマートブレイン社の結構偉い人だよね？ 仕事大丈夫なの？ 因みに美玖さんと言うのはこの人の彼女で社長の正幸さんまさゆきの秘書をやつている。見た目は怖いけど、実は結構優しい人なんだよね。

「ダメイジヨウウブやつて嬢ちゃん！ ウチの仕事は基本部下に丸投げしどるし、美玖やつて今日は正幸と一緒に会議に……」

「こんな所で何を遊んでるんだ貴様はああああああああ！」

「つてええええ美玖！ ？ 何でおんねん！ ？」

美玖さんが章治さんを怒鳴り散らしながらゲームセンターに入つて来た。そのレディースースのシャツのボタンを全部止めているが、その大きな胸のせいでシャツがパツツパツになつてしまつて。しかもそのボタンの隙間から胸の谷間がほんの少しだけ見えるから……正直エロい。

「正幸に頼んで貴様を探しに来たんだ！ まったく、私が目を離すとすぐこれだ……！」

「やつたらウチに首輪なり何なり付けて従順させてみたらどうや？ 嬢王様？」

その言葉を聞いた途端美玖さんの顔がボンッと爆発したみたいに赤くなつた。

「な、なな何を言い出すんだききき貴様は……！？」

「からかつただけやんか、美玖つてホンマかわええなあ！」

そのまま一人はゲームセンターから飛び出し、追いかけっこを始めた。ウン、ホントに美玖さんって可愛いよね。じゃあ兄の捜索を続けますか。

『オイ! ハメハ-ホントにおまわりなのかよー。ウチのリュウタ
見てねえつてビービー見だーああんー。』

『俺に質問をするな』

『落ち着きなつて兄さん、いくら探さないと良太郎が怖いからつて、

『せやでモモの字。こゝで喧嘩したつて埒が
……』

『もう俺はこれで失礼させてもらひ。まだ事件の調査中なんでな』

……ウン、何だかすつごく聞き覚えのある声がした。しかもリュウ君のお兄さん達じやん。

そちらを向いてみるとやはりいた。まったく同じ顔だけど性格が全然違う野上兄弟の内の三人だ。

赤いジャケットを来た警察の人ケンカ腰でリュウ君を訊ねていたオールバックに赤いメッシュを掛けた不良っぽい人が長男の百太さん、通称モモさん。

それを冷静に仲裁している青いメッシュにメガネを掛けた色男オーラを放つてるのが次男の浦太さん、通称ウラさん。

そしてその一人よりも大柄で長い後ろ髪を縛つて黄色いメッシュを掛けた立つたまま寝ている人が三男の金太熊さん、通称キンさんだ。

これであと四男の良太郎君と末っ子のリュウ君で野上兄弟全員集合状態なんだけど、やつぱり彼らもリュウ君を探しているらしい。

「おや？ やあ亜由美ちゃんじやないか。こんなところで何してたのかな？ ひょっとして大学の帰り？」

そんな事を考えていると、ウラさんが私に気付いて話しかけてきた。

「ハイ、そなんんですけど、兄を探してて……何でもリュウ君と一緒にいるとかで……」

「へえ～ そなんだ、奇遇だね。実は僕達もリュウタを探してたんだよ。よかつたら僕と二人で探しに行かない？」

「そだなあ～ やっぱりここは遊園地にでも言つて観覧車から街を見下ろしながら探した方が得策じやないかなあ～？」

……何かこの人急にナンパして来たよ？このイケメンフェイスで口説かれたら普通だつたら落ちるんだろうけど、私的にはまだ兄さんの方が……って何言つてんだ私！？ち、違うよー違いますよー？私は決して「プラ」「ンなんかじゃありませんよー！？」

「ん？どうしたの、顔赤いけど…熱でもあるんじゃないかな？」

そう言いながら額に手を当てて来た。

……ウン、何か落ち着いてきた。ありがとうございますウラさん。

「いや、大丈夫です。ところであそこの二人はどうするんですか？」
「あの二人だつたら別にほつといても大丈……」

「ウラちゃんドーン！…」
「ブゴツ！？」

二人の兄を置いて行こうとしていたウラさんの背中にこの人達と同じ顔（但し若干幼い）の男の子が体当たりして馬乗りになつてきた。何かゴキッて音が聞こえて来たんだけど大丈夫だよね？まあ天罰なんだろうけど……。

そしてそのウラさんに天誅を下した男の子は、ウェーブ掛かつた髪に紫のメッシュを入れた野上兄弟の末っ子の龍太朗君、通称リュウ君だ。

「ウラちゃんまたナンパしようとしてるー。僕にもナンパ教えてよー」

「リュ、リュウタ…とりあえず、どいて……」
「やーだー。ナンパ教えてくんないとどかなーい」

これだからこの子は厄介なのだ。相当好かれた人の言う事くらいし

か聞かないし、しかも野上兄弟の中で唯一聞くのは良太郎君だけだ。一体どういう教育させてんの？

あ、そうだ……この子って確かにうちの兄と一緒にいたはずだよね？ じゃあ兄は一体どこに行ってしまったのだろう……。

「ねえリュウ君、兄さん探してるんだけど知らない？」

「あ、亜由美お姉ちゃん。歩だつだら『晩』はんの支度するから帰る』って言つて帰つたよ」

……どうやら私は無駄な労力を消費してしまつていただけらしい。帰ろ……。

「そつが、じゃあ私も帰るね。とにかくで、何で兄さんと一緒にいたの？」

「亜由美お姉ちゃんが帰つてきになかったから探してたんだつて」

「そうだつたんだ……ああ見えて兄さんつて意外と私の事心配してくれてたんだね……。

「あ、それと買い物のついでついたよ。家に何もなかつたみたいだから」

前言撤回。私つてついでか！？ 買い物のついでなのか！？ これは兄さんに一度乙女が何たるかを教えなければならぬみたいね……。

「じゃあまたねリュウ君ー」

「またねー！」

「ね、ねえリュウタ……いに加減に、どいて……」

「しづめらぐくそうじとけ」

「自業自得やな」

「一人までーー?」

後ろから楽しそうな（ウラさんは微妙）声が徐々に遠くなつていって、中、私は兄さんの待つている家への帰路を走つた。

「あ、おかえり」

家に帰ると兄さんは夕飯の支度をしていた。そしてその手に握られたフライパンに入つてているのが何がなんて見なくとも分かる。

兄さんの唯一作れる料理・チャーハンだ。しかも何気に美味しいから文句も言えない。

これが兄さんが菓子パンとチャーハンしか食べない理由だ。偶に外食に行く事があつたとしても、基本的にジャンクフードくらいしか食べない。ホントに粗食だよね。

「兄さん、今日の料理当番つて私の筈じゃ……」

「何時帰つて来るか分からなかつたからね。それに、今回はチャーハンだけじゃないよ」

「へ?」

『おーい歩うーー!持つて来てやつたぞおーー!』

兄さんの言葉に間抜けな声を漏らすと、突然玄関の扉越しから声が聞こえてきた。

「来たみたいだね……亜由美、代わりに出てあげて」

「あ、ウン」

私は一度玄関の前に立っていたので素直にドアを開けるとそこにはいくつかのタッパーを持った茶髪の青年が気のいい笑顔で立っていた。

「お、亜由美ちゃん！歩の方はもう出来たのか？」
「真司さん？何ですかそのタッパーは？」

彼は私達のすぐ隣の部屋に住んでいる新人記者の城戸真司さん。ちょっと抜けてる所とかがあるけどかなり良い人だ。
あと、何気にこの人が兄さんの友人の中で一番常識人だつたりする。私としても一人は欲しいツツコミ役の人だ。

「ああこれ？俺の作った特製ギョーザ！歩が俺の分のチャーハン作ってくれる代わりに、交換してくれってさー。」

そう言いながら一つのタッパーのフタを開くと、そこにはギョーザが二十個近く入っており、芳ばしい香りがして食欲をそそる。
彼も兄さんと同じタイプで一つの料理しか作れないけど、それがすごく美味しいのだ。

このギョーザが兄さんの一番の好物だつたりする。

「そう言つ事。じつも出来たから一緒に夕食にじょつか
「おーじゃあゴチになりますー！」

そう言いながら真司さんが部屋に上がりつて来て食器などの準備を始めた。
うーん、何だろ？…何か忘れてるような……。
ま、いつかー兄さんも楽しそうだしねー！

If stor も須藤兄妹が本当に兄妹だつたら～（後書き）

如何でしたでしょうか？

実はこのお話、私がディージェントを投稿して間もない頃に書いて、今まで温めて来たエピソードなんです。なので登場人物もファイズ編までの人+オリジナルの方々しかいませんし、あまり得意ではない一人称で書いてありますので何時もと随分と違う雰囲気の作風になりました。

そして遂にやらかしちゃった亜由美ちゃんブラ「ン疑惑」

そんな亜由美ちゃんに萌えた人、感想にて挙手をお願いしますー

）ノ その結果によつては本編の歩への好感度が変わるかもです。（あくまで“かも”なので期待はしないように）

こちらの番外編は本編と違つて不定期更新になりますが、今後も楽しんで頂ければと思います。

バレンタインデータ、考えた方が良いかな……。

それではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2115z/>

水音ラルの超絶番外編

2012年1月8日18時52分発行